

第7回

上智大学アフリカWeeks

アフリカ地域との教育・研究交流を活発に展開

5月15日から29日まで、「第7回上智大学アフリカWeeks」が開催された。本学は、グローバル社会でより一層存在感を増すアフリカをグローバル化推進の戦略的地域と位置付け、アフリカ開発銀行や現地教育機関との連携締結、アフリカ研究の推進など、教育・研究交流を活発に展開している。今回のアフリカWeeksでは、講演会、セミナーなどを実施。公募で集まった学生有志がほとんどの企画の運営に携わり、司会や通訳補助などを務めた。

■アフリカのスラムに学
校を作る子どもたちの
笑顔、命の輝き

15日、ケニアのスラム街・キペラで困難な状況にある人々とともに活動を行う「マゴンスクール」を運営する早川千晶氏を招いて講演会が行われた。冒頭、キペラで生活する人びとの現状を解説。「さまざまな困難を抱えながらも生きることを諦めない人びとの前向きな工夫の裏に、病と闘い、

常に死と隣り合わせにある生活環境の過酷さがある」と述べた。

続いて、マゴンスクール設立の背景や、絶望から立ち上がり希望を持つて卒業したOBOGのインタビューなどを紹介。スラム街での学校運営の意義の一つに、「教育は困難から抜け出すための知恵や技術につながる。マゴンスクールのOBOGが力強く前に進んでいく姿を見ていると、学ご

この力を改めて実感する」と語った。

講演後の質疑応答では、日本からできる支援・交流に関する質問に対して「まずは知ることが大切。そのためには対話が必要で、対等な人間として向き合い、議論することで新たな道が見えてくる。同時に、現在までの歴史を学ぶことは今を紐解く糧になる」と答えた。会場には100人近く

の聴衆が集まり、オンラインでは約1200人が視聴。多くの関心を集めた。22日、在京レソト王国大使館から外交官を招いて講演会が開催された。レソトは四方を南アフリカに囲まれた内陸の王国で、国土全体の標高が1400メートルを超えることから「天空の王国」と呼ばれている。

はじめに、レソト王国大使館で参事官を務めるソリー・ママスツファ氏が登壇し、レソトを紹介した。地理・人口などの基本情報、教育システム、歴史的背景、伝統衣装、

食料、家事道具などについて、スライドを投影し、参加者は、自然豊かなレソトの写真を見ながら熱心に耳を傾けた。続いて、日本人との結婚を機に来日し町田市で暮らすレソト出身のルーシー・コスギ氏が登壇。現地での結婚の様子や、日本での生活や子育ての苦労などを語った。

講演後、レソトなどアフリカ南部で古代から伝わるボードゲーム「モラババ」や、会場に持参したレソトの伝統的な衣装・帽子を紹介。参加者は実際にゲームに挑戦したり、衣装や帽子を身につけて写真を撮影したりと、思い思いにレソトを感じていた。

■上智大学アフリカ研究の柱でアフリカ展開を行っていることを紹介した。続いて、本学でアフリカ研究に携わっている3人の教員が順に登壇。総合グローバル学部の戸田美佳子准教授は、中部アフリカ地域を中心に、人間の暮らしが生態的な環境とどのように対応しているかを研究している。その中で障害者の営みにも注目。障害者を通したアフリカ地域研究、非西欧社会における障害観、障害者と文化人類学やジェンダー研究への接合など研究テーマが広がっていると話した。

外国語学部ポルトガル語学科の矢澤達宏教授は、アフリカとブラジルの2つを研究対象としている。サハラ以南アフリカの特に旧ポルトガル領のアフリカの政治・歴史、互いを理解することが大切だと強調した。最後に山崎講師から、2015年から始まった本学の実践型プログラム「アフリカに学ぶ」の説明があり、コートジボワールにある協定校CERAP(平和・研究活動センター)からのビデオメッセージが流された。併せて、アフリカ理解促進につながる機会の創出など社会貢献についても紹介し、セミナーを締めくくった。



笑顔で力強く語る
早川千晶氏

資源エネルギー庁長官講演会

「世界の中の日本のエネルギー情勢」を開催

高校生、大学生と共に学び考える

5月15日、2号館17階で上智学院サステナビリティ推進本部、上智大学経済学部経済学科および資源エネルギー庁の共催



熱弁を振るつ保坂長官

保坂長官を囲んで

の下、資源エネルギー庁長官の保坂伸氏を講師に招き、「世界の中の日本のエネルギー情勢」と題して講演会を開催した。次世代を担う高校生、大学生など若者たちと共に、グローバルな視点でのエネルギー問題、サステナブルな社会を構築していくうえで課題につ

いて考えることが目的。後半のパネルディスカッションには本学学部生の他、高大連携の一環で2人の高校生が登壇した。保坂長官は、講演の中で日本のエネルギー自給率、電源構成について触れ、エネルギー政策の大原則「S+3E」について論じた。Sとは安全性(Safe

ty)、3Eは安定供給(Security)、経済効率性(Economic Efficiency)、環境適合(Environment)のこと。ロシアのウクライナ侵襲前、世界は環境適合に向かっていたが、侵襲後のいま安定供給に戻ってきている。さらにコロナによる景気悪化で、経済効率性のコスト問題も起きている。3Eをバランスよく行う必要があり、環境適合のCO2問題をクリアしたとしても、国が貧しくなったり、停電が生じたりするという訳にはいかないという問題に直面している」と述べた。

さらにロシアからの石油・天然ガスの輸入規制による世界全体の供給量不足や価格上昇について触れ、「日本は自国のみではなく世界80億人のことを考え、またアジアの代表としてアジアのためには、長官がひとつひとつ意見を言わなければならぬ。それがこの国が生きていく道であり、我々の責任である」と強調した。

講演会後半のパネルディスカッションは、鈴木政史地球環境学研究所教授がファシリテーターを務め、保坂長官と高校生2人(栄光学園中学高等学校、横浜雙葉中学高等学校)、本学学部生3人が登壇した。脱炭素を促す

インセンティブは何か」と理由は「今後日本で水素エネルギーが導入されるのか」など、学生たちが身近な疑問や質問を投げかけ、長官がひとつひとつ丁寧に回答していった。参加者からは「なぜ省エネが重要なのか、改めて理解できた。自学科の学びとエネルギー問題をどのように絡めていけるのか、考えを深めていきたい」「資源エネルギーと気候変動や環境問題はジレンマの塊のようで、折り合いをつけながら解決のために奮闘しているのだと感じた」などの感想が寄せられた。

■学生企画
学生有志25人がアフリカWeeksの企画全般の運営を担った他、次の学生企画を実施した。
①アフリカン・ワークショップ
26日に大学生と高校生を対象を限定してワークショップを開催。本学卒業生で、Warm Hearts Coffee Clubを運営する山田真人氏(文英および神神卒)を招いて、コーヒーを試飲しながら話を聞いた。山田氏は自身の団体がやっているマラウイの学校給食支援を紹介。学校給食が持つ力を熱く語り、支援の仕組みやフェアトレードについて詳しく紹介した。
②雑誌企画
雑誌企画は3年目。12ページの雑誌「With AFRICA」を発行した。現在、学生センターや図書館で配布している。
③図書館展示
図書館1階カウチンター前で、アフリカの工芸品やアフリカ関連書籍を紹介する企画展を実施。6月23日まで。
■その他の企画
20日に「アフリカ地域研究者と話をしよう」、23日に「ルワンダで義足を作る」を開催した。



ワークショップは
全員笑顔で終了